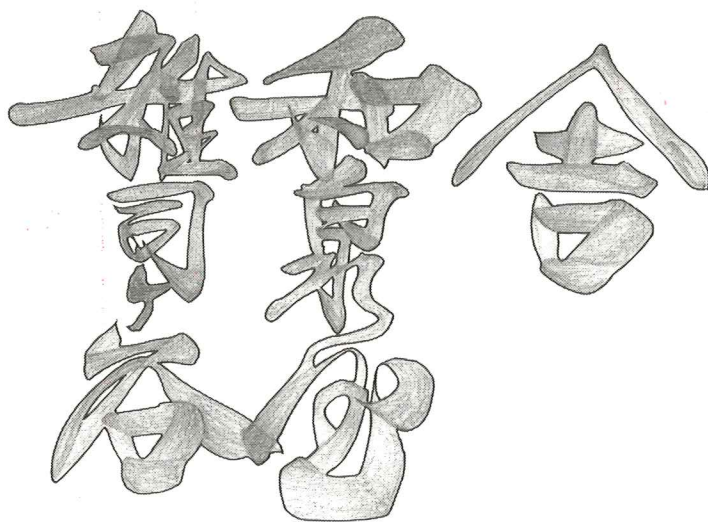
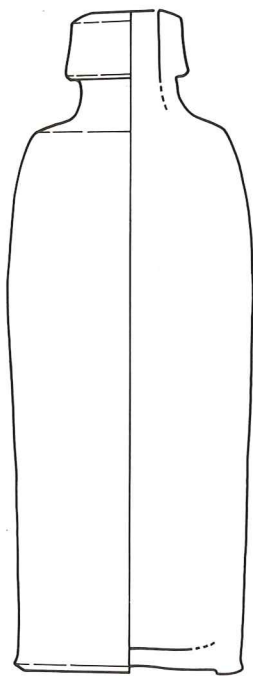


かたりべ 16

豊島区立郷土資料館だより



0 5cm

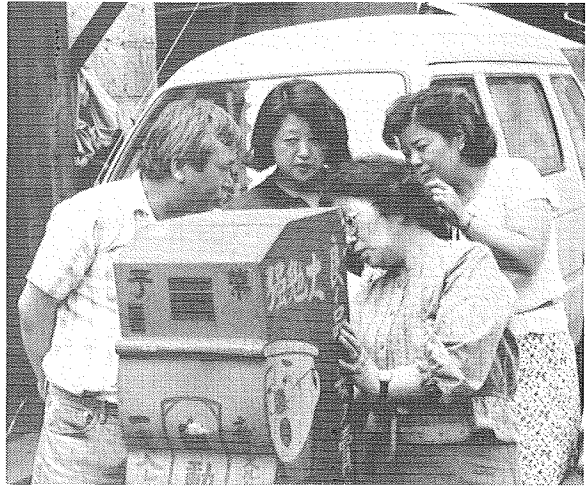
一五〇年前の酒徳利

この徳利は、この八月二三日に区土木課が区内東池袋四丁目三番八号付近の道路を工事している時に、地下一・五メートル位の深さで発見したものです。出土してすぐ、郷土資料館にもたらされましたが、残念ながらこの徳利とともに出土した他の陶磁器類は処分したとのことでした。

この徳利は、岐阜県美濃地方の製品であると考えられ、この美濃地方で江戸時代後期に作られた「高田徳利」の系譜を引く、幕末から明治時代初期に使われたものです。

大きさは、高さが約二一センチメートル、直径約七センチメートル強を計り、容量は五四〇cc（三合）となります。徳利の表面には『雑司ヶ谷 和泉屋 山吉』と鉄釉で書かれており、雑司ヶ谷にある屋号「山吉」の和泉屋がお客様さんに配ったものでしょう。お客様は、この徳利を持って和泉屋まで酒や醬油・酢などの液体物を買いにいったのです。

この和泉屋は、現在でも東池袋二丁目で営業を続けているようです。このような文字の書かれている出土品は、一つの店がどの位の範囲の人々を対象に営業をしていたかを知ることができます、貴重な資料ということが出来ます。（橋）



動いた 動いた

区内では、都市再開発にともない、人々の日常の暮らしの中から貴重な歴史生活資料が急速に失せつつあります。衣類・台所用品・農具・商業用具・美術品・記録類（大福帳・香奠帳・日記類）・写真（昔の区内風景や風俗がわかるもの）等々、昭和三十年代頃までに使用していた生活資料の所在の情報を得ようという目的で行ないました。

旧西巢鴨地区は、大部分が戦災による被害を受けているため、以前の調査地区に比べると所在の確認は難しいものでした。しかし、昭和初期頃からの日常生活の様子がわかるお話しを、多くの方々から聞けたのは成果のひとつでした。

本年度の歴史生活資料所在調査は、五月十六日から六月一日まで、のべ十四日間で行なわれました。始まった時は垣根の蔓薔薇がきれいな初夏でしたが、調査が終わる頃には紫陽花が色づいてきました。

これまで、「旧高田・雑司が谷地区」、「旧長崎地区」、「旧巢鴨地区」と調査を行ない、今回は、「旧西巢鴨地区」の二十六町会、計二〇七九〇世帯を調査対象とさせていただきます。調査員は、応募のありました十八名で、二人一組が家々を訪ねるといいう形で行ないました。

この写真は、西巢鴨三丁目石川たばこ店さんでの調査風景です。昭和初期、店頭に置いていた菓子の自動販売機です。蔵から出してもらい、約五十年ぶりに動いたところです。旧中仙道沿で昔から商売を続けておられる当家の方々からは、当物を語る諸資料を拝見しました。そして、往時の話しを時間のたつのを忘れて聞き入ってしまいました。

当地区からは、種苗業や帝国小学校、明治女学校などの近代教育の話しと同様に、牧場に関する話しの聞きとりが多く得られました。資料館では、その成果の一部を展示しています。

本調査では、資料館の収蔵庫が手狭なことも

あり、物資資料の寄贈を受けられませんでした。多くの方々からお聞きした話しは財産です。今後の資料館の企画運営に活用させていただきたいと考えています。

調査員の中には所在調査のベテランもいて心強いものでしたし、初体験者にも調査の楽しさを味わってもらえたと思います。この調査が、調査員はじめ区民の皆様にとって、自分達の身近な生活文化を省み、現在そして明日を考えていこうとするよすがとなれば嬉しく思います。残すところ、「旧池袋地区」の調査のみとなりました。来年度の新たな調査目的と方法を思索しております。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました区民の皆様、調査員の方々、どうもありがとうございました。 (福)

☆貧者の一灯―因縁の豊島経泰―
面影橋畔の山吹の里案内板が倒壊した。
新築の計画が進み、文面を書くことになった私は、太田道灌ゆかり深い埼玉県越生町を訪れた。ここには、県・旧指定の山吹の里が観光地として整備されている。折からの夏祭、鎮守社では三台の飾り屋台が出てにぎわう。なんと一台に「豊島左衛門尉経泰」の人形が飾られている。なぜ越生に豊島氏が? 正史にない経泰とは? この夏、また新しい研究課題がみつかった(新案内板できてます。K)。

今回の長野現地調査の目的は大きく分けて二つであった。一つは今年度刊行予定の『学童疎開資料集・1』（仮題）に関して、その中心舞台となる戸倉・上山田温泉の再調査、特に収録を予定している日記・書類に現れる地名等についての確認である。もう一つはこれまでの現地調査でまだ訪問することのなかった疎開先、

具体的には旧西塩田村・旧室賀村・旧浦里村（以上、いずれも現在は上田市）・旧長窪古町（現在は長門町）・武石村の調査である。ほとんどの疎開地には精粗の差はあっても一度は訪れているが、長野県では若干残っていたのである（なお、今回でも二か所ほど未調査地を残してしまつた。学童疎開の現地調査を始めて足掛け四年になる、それほど多地域に分散させられていたということか）。

学童疎開の現地調査でいつも感じるのは、現実に疎開で過ごしたのと同じ季節を選んで日程を組めたらということである。昨年三月、長野県北部の再疎開先に行つて一面の銀世界を見た瞬間、この地に子どもたちが再疎開したのは四月以降であり、少なくともこうした雪は見なかったはずだとの後悔が走つた。今回は疎開して一季節としては間違いはないのだが、例えば第一の目的にそくしていうと、主要な資料である学童の疎開日記が書かれたのは一九四五年の

一〜四月であり、雪の中の生活描写が多い。そうした意味ではやはり適切とは言いがたい。何とも計画性のない、おそまつな話であるが、これが長期的な見通しと機動力とを持ちえない資料館の現状なのである。

それはともかくとして、調査自体の成果には見るべきものもあつた。それらの全体については『資料集』や今後の館の展示その他の活動で示していきたい。ここではそのいくつかを挙げておきたい。

まず、生活資料としては旧西塩田村・前山寺の現在、重要文化財に指定されている三重の塔を解体修理した際に出た廃材で作つたという長さ四メートル弱の飯台がある。これまでも飯台の類はいくつか寄贈を受けているが、いずれも一・五メートル程度のものであり、由来といひ、大きさといひ、これまでとは違った特色がある。ぜひ展示に使いたいとの感を強くしたが、果たして七階までうまく運びこめるであろうか。その他、旧浦里村・宗安寺の学寮看板、武石村・妙見寺に残る張紙など、興味深く見せていただいた。当時の写真も妙見寺や旧室賀村・前松寺でお借りすることができた。後者では疎開学童用に新設された便所と風呂の写っているものが含まれており、これは談話では多く聞いたものであるが、写真としては初めて見るものであ

る。

今後の研究課題として注目しておきたいのは池袋第六国民学校の再疎開での移動・再編成である。旧長窪古町・西蓮寺では一九四五年四月以降、最初豊島区の学校が、ついで入れ代わりで杉並区の学校が再疎開してきたとのことである。たかだか数か月での入れ代わりは、どのような事情によつたものだろうか。そして、池袋第六の子どもはどこへ移動していったのだろうか。学童疎開の調査は終わりそうにな

い。自転車など、いろいろ便宜をはかつていたのだ。戸倉ホテルや千曲館の皆さん、後日学校日誌のコピーを送付された武石小学校の先生をはじめ、いつもながら現地の関係者のご協力にはただただ感謝の念を表すほかはない。（青）

学童疎開の現地調査は、山形県にも行きました。寒河江市と上市市です。寒河江へは長崎第二国民学校の疎開経験者の方々が会をつくつて集団で訪問したのに同行したものです。皆さんのお話を聞きしながら、当時、生活した学寮や学校、神社などをまわりました。上山では主に第二師範付属国民学校の再疎開について調査し、再疎開先決定の経過を当時の先生から詳しく知ることができました。

染井遺跡（日本郵船地区）の発掘調査で発見された縄文時代の遺物は、土器・打製石斧・石鏃などです。

縄文時代の時期区分は、時の経過とともに変化する土器の文様の特徴をとらえて段階を区切る方法で決められています。そして、縄文時代全体が大きく草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六段階に大別され、さらにそれぞれが一〇前後の土器形式により細別されています。

日本郵船地区で発見された縄文土器は、そのうちの前期・中期・後期のものでした。発見された土器形式を列挙すると次のようなものです。

【前期】 諸磯式、浮島式、十三菩提式。

【中期】 加曾利E式。

【後期】 称名寺式、堀之内式、加曾利B式。

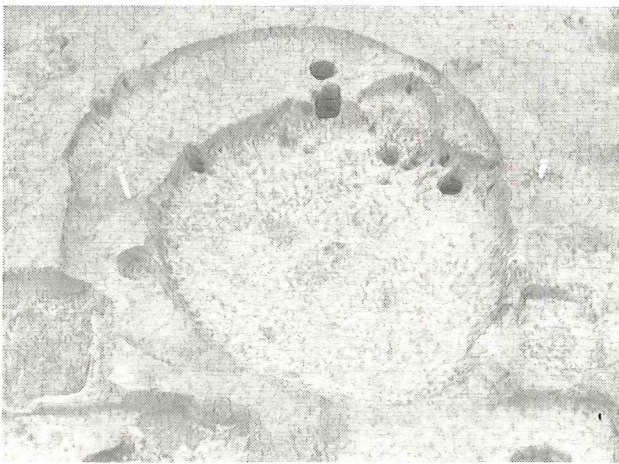
以上の土器は、今年の初夏に発掘した近接する（丹羽家地区）でも発見しており、また八月に調査した染井通り沿いの（加賀美マンション地区）でもその一部が発見されました。この事実は、これらの土器を使った縄文時代人の活動の痕跡がこの一帯に広がっていることを如実に示しています。おそらく、染井通りをはさむ台地上一帯がその範囲ということなのでしょう。

「豊島の遺跡第二回」で、縄文時代遺跡がどのような場所にあるかを多少説明しましたが、ここでも良く似た地形の場所に遺跡があるという

ことがわかります。

しかし台地の上に土器が散らばっている状態だけが、縄文時代人の生活した痕跡というわけではありません。「日本郵船地区」では、中期の加曾利E式に属する土器を伴った堅穴住居が一軒発見されています。残念ながら、ここでは一軒しか発見されませんでした。この堅穴住居は建物建設で破壊される範囲からは外れていたた

縄文時代の堅穴住居跡



め本調査の対象にはなりませんでしたが、周辺一帯に堅穴住居が密集する「集落（＝村）」のあったことが証明されたわけです。

（日本郵船地区）で発見された堅穴住居は、直径約四メートルをはかり、発見された面から一五〇センチメートル位掘り窪めており、数本の柱穴がありました。しかし、江戸時代の植木穴によって壊されて三日月形に残されていたため、炉の跡は発見されていませんでした。

これは、豊島区内で発見された最初の縄文時代堅穴住居として記念すべき遺構です。ただ、上述のように、後世に大部分を破壊されており、今後完全な形のもが発見されること期待されるということです。

この他、「日本郵船地区」では「落とし穴」も発見されています。今回の調査では一基しか発見されませんが、この「落とし穴」は本来は密集して残されていることが多いと、さらに周辺の調査の中でその数を増やしていくものと思われます。この「落とし穴」も区内最初の発見です。

（橋）

かたりべ

No. 16

1989年10月5日

発行

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話03-980-2351